

未完成な『スピノザと表現の問題』：不十分な表現的生成の理論

大阪大学大学院 人間科学研究科 博士課程

佐々木 晃也

1. イントロダクション

スピノザによれば、ある製作物の「完全／不完全」を評する仕方は二つある (E4 Preface)。一つは、その製作者の企図に照らして評する仕方であり、もう一つは、任意の型 *modèle* に照らして評する仕方である。ゆえに、ある製作物をその製作者自身にとって「完全」であっても、別の人がその人が持つ型に照らして「不完全」と評することがありうる。本発表では、この二つの評価の仕方が依存している、製作物 (=テキスト) の二つの解釈の方法を、「内的な方法」と「外的な方法」として弁別し、前者の内的な方法に従う¹。

私は『スピノザと表現の問題』(以下、SPE) を「未完成」と評している。私は任意の型に照らして「不完全」と評しているのでも、同時期のドゥルーズの著書(『差異と反復』と『意味の論理学』)に見出しうる型に照らして評しているのでもない。私はドゥルーズ自身のスピノザ読解の企図に照らして SPE を読み、加えて SPE に関するドゥルーズ自身の不完全さの自覚や、その不完全さを補うような再解釈の事実を考慮して、「未完成」と評している。私の評価を可能にしているのは、少なくとも (1)ドゥルーズの企図、(2)不完全さの自覚、(3)後年の再解釈の三つである。

(3)に関しては、1981年の第二のスピノザ論『スピノザ 実践の哲学』(以下、SPP)、(2)に関しては、1977年の「哲学史の規範に従って最も真剣に研究したのはスピノザである」が「スピノザを理解することはまだ始まってさえいない」という述懐(D 22)が、今のところ状況証拠として十分である。そして、(1)ドゥルーズ自身の企図は、そのままに「哲学史の規範に従って」「スピノザを理解すること」である。なるほど、SPEにおいてドゥルーズは、プラトンからライプニッツに至る哲学史におけるスピノザの特権的位置を見出すことに紙幅を割いており、ドゥルーズは、表象ではなく「表現」、超越ではなく「内在」という観点で哲学史上のスピノザの位置を際立たせている²。とはいえ「哲学史」とは、外在的なバイアスを重視した「水平的な」哲学史だけを意味するのではない。当時のフランスで

¹ ドゥルーズによれば、スピノザは自らの聖書解釈(『神学政治論』)において、神学的伝統を方法の観点で批判した。「(神学者たちは) 神聖なテキストが何を企てていたかを問おうとはしなかった」、「聖書を解釈することのできる[...]内的な方法が欠けていた」(SPE 44-48)。スピノザの批判は、積極神学であれ否定神学であれ、聖書を書いた者の企図を考慮しない方法、本発表で外的方法と呼んでいる方法が採用されていることであり、これに対してスピノザ自身は内的な方法に従った(『神学政治論』第7章)。

² デカルトからの弁別は1, 4, 10章、プラトニズムからの弁別は11章、神学的伝統からの弁別は3, 11章、ライプニッツからの弁別は15章が、とりわけ明晰である。また SPE での紙幅は相対的には少ないが、ニーチェとの連関を明示し、道徳ではなく「倫理」の思想家としてのスピノザ像を際立たせてられている。

は、当の哲学者自身の内面性を重視する「垂直的な」哲学史観があった³。そしてドゥルーズ自身には、最初期『経験論と主体性』(1953)から晩年まで一貫した、自らの「垂直的な」哲学史研究の流儀があった。

ドゥルーズによれば、「一つの哲学理論とは展開された問い」であり、この「問いに折り込まれている意味を徹底的に展開すること」が哲学理論の本領である (ES 119)。そしてまた、哲学史研究とは「ある特定の哲学者が述べたことをもう一度述べるのではなく、哲学者には必ず言外にほのめかしているものがあるが、それは何か、哲学者本人は述べていないけれども彼の語ったことに現れているものは何なのか、を語る」ことである (PP 186)。要するに、研究対象となる哲学者の問いが何であり、そしてその問いに折り込まれている意味を徹底的に展開すること、本人が述べていないことでさえも「自らの口を通して」述べるのがドゥルーズの哲学史研究の流儀である。ドゥルーズはこうした自らの規範にも従って「スピノザを理解すること」を試みた。そうでなければ、どうして「表現」や「偶然の出会い」など、スピノザ自身は概念として用いているようには思えない語を、スピノザの「概念」として多用することができたのだろうか。

そういうわけで、「哲学史の規範に従って」「スピノザを理解すること」という企図は二重の意味を持っているが、内的な方法に従う本発表では、ドゥルーズ自身の哲学史の規範を重視する。つまり私は、ドゥルーズが、スピノザ哲学の問いはいかなるものとして捉え、その意味をどれほど十分に展開しえたか、という点において SPE を検討する。そして最終的に言いたいのは、SPE においてその問いに由来して展開された理論が不十分となっているがゆえに、それが「未完成」である、ということである。

2. スピノザの問い

スピノザは『エチカ』で認識ないし知覚の様式を三つに区別している (E2P42 備考)。意見あるいは表象と呼ばれる第一種、理性と呼ばれる第二種、直観と呼ばれる第三種の三つである。そして、第一種で形成される観念を「非十全な」、第二種と第三種で形成される観念を「十全な」と形容し、後者を真理とみなす。

第一種と第二種の断絶は、原因の認識の有無に依存している。第一種は事物の表象であれ聞き覚えの意見であれ、偶然の出会いにおける結果の認識に留まっている。とはいえ「結果の認識は原因の認識に依存しかつこれを含む」(E1A4) ので、もし結果の認識に含まれている原因の認識に至ることができれば、当の結果の認識はそれ自身の原因の認識に裏付けられた第二種になる。非十全な結果の観念は、その原因となる十全な観念と内的に一致するならば、「真の観念」となる。

ところで、スピノザによれば、人間は「生まれながらの無知状態」であり、「生まれつき、

³ ドス (2007) によれば、二つの哲学史の方法を区別していた哲学史家マルシャル・ゲルー (Martial Guéroult) は、テキストの方法論的読解において、ドゥルーズの師であった (114 頁)。実際、ゲルー自身が垂直的な哲学史の方法を実践したマイモンやフィヒテのモノグラフは SPE や『差異と反復』でも参照されている。ゲルーが二つの方法の区別を語ったものとしては *La méthode en histoire de la philosophie* (1974) などがある。

事物の原因を知らない」(E1 Appendice)。また第三種で認識しようとする努力は、第二種からは生ずるが、第一種から生ずることは不可能である (E5P28)。ゆえに、第二種への移行を意味する最初の十全な観念の形成は、一つの生が「奴隷」として生きられるか、「自由な人」として生きられるか、の分水嶺の問題である⁴。ところが『エチカ』は、その推論を最初から第二種の十全な観念「共通概念」に基づいて進めており (E2P40 備考1)、知性を完成させる方法に関しては論理学の問題としている (E5 Preface)。これはスピノザの『知性改善論』の方の主題である。しかし『知性改善論』では、人があらかじめ一つの「真の観念 (生得の道具)」を持っていることが前提されており (TIE § 30-35)、その形成過程は論じられていない。ゆえに、最初の十全な観念=共通概念の形成の問題は、スピノザ自身が語らなかった問題であり、またそれは倫理的な生にとっての問題であるだけでなく、方法としての哲学や『エチカ』の開始を理解する上でも決定的な問題である。

さて、「本人は述べていないが彼の語ったことに現れているものは何なのか、を語ること」がドゥルーズの哲学史研究であり、一つの問いが含まれる意味の徹底的な展開がドゥルーズのタスクであった⁵。SPE 全体を支配している一つの問いを、スピノザの術語で定式化しておくならば、生まれつきの奴隷である我々はいかにして自由な人になるのか、である。ドゥルーズが SPE の問いとするのは紛れもなくこれであり、中心的な問題となるのは、我々に与えられている諸観念が必然的に非十全なものであるにも関わらず、いかにして十全な観念の形成に至るのか、である (cf. 134-135)。

3. 経験論者スピノザ

SPE における「表現 expression」の観念はスピノザ理解の鍵である。ドゥルーズは「表現」の観念が「一般的規則」として相関語「説明-包含 explication-enveloppement」(「展開-内含 développement-implication」) が伴うことを強調している (cf. 11-12)。それは第一に、この相関的顕現を意味する「表現」が、スピノザの存在論を流出説や創造説から弁別することを可能にする概念だからであり (chap.11)、第二に、スピノザの観念論における表象の次元 (観念と事物の対応) と表現の次元との弁別を可能にする概念だからである。

17 世紀哲学の共通理解として、観念とは一つの産出された事物であり、加えてスピノザは、産出の結果である限りの観念 (結果の認識) は、必ずそれを産出する原因 (原因の認識) が内含する、という意味で、「結果には必ずその原因が伴う」という合理主義と「原因は結果の内であり、結果はその原因によってある」という内在主義の立場をとる。ゆえにドゥルーズは、非十全な観念はその原因を「包含するが説明しない」ので「非表現的観念」、

⁴ 加えて、スピノザは、第一種の人を「奴隷」、第二種の人を「自由な人」(E4P66 備考)、第三種の人にはそれに加え、「精神の最高の努力および最高の徳」、「存在しうる限りの最高の精神の満足」、「最高の喜び」、「至福」を享受する人、と考えている (E5P25; P32 証明; P42 証明)。ゆえにドゥルーズは、第一種と第二種の間「真の断絶が現れて」おり、「認識の種類は同時に生き方の違いである」と言う (SPE 269; 268)。

⁵ 第二種から第三種への移行も無視されてはいない。SPE では非十全な観念が非表現的観念、十全な観念が表現的観念と呼ばれ (125;132)、共通概念の形成によって/において、人は表現的になり、さらに直観知の形成によって/において「完全に表現的になる」(294) と区別され、論じられている。

十全な観念はその原因を「包含しかつ説明する」ので「表現的観念」と解する⁶ (132; 125)。

さらに観念には、それが表象的にせよ表現的にせよ形相と質料があり、観念の形相的原因は自らの思惟力能（理解力）である。共通概念の質料的原因は、少なくとも二つの諸身体（自らの身体とそれが出会う外的物体）との「構成 constitution」である。したがって、もし表象的観念が内含する諸身体の構成の観念を形成することができれば、その原因の観念に裏付される範囲のあらゆる表象的観念が表現的観念となる。また同時に、原因の観念の形成はその形相的原因として力能としての理性をも展開することになるので、この意味で最初の表現的観念の形成は、人が理性の能力を所有すること、部分的に理性的ないし自由になることをも意味する。ゆえに、形相的観点から見れば、表現的観念の形成は、力能としての理性の能力としての理性への生成をも意味する。この意味でスピノザは、理性の生得性を前提するという意味ではやはり合理論者であるが、それが所与の能力ではなく、能力に生成するものとする点では経験論者である、ということになる。

こうした「表現」に基づいた観念論解釈があるがゆえに、SPE では経験論者としてのスピノザ像を前景化される (134-135)。そしてここにドゥルーズが再定式化できるところのスピノザの問いが存する。すなわち、必然的に非表現的観念しか与えられていないにも関わらず、いかにして最初の共通概念は形成されるのか。検討すべきは、SPE で徹底的に展開されたはずの、この最初の共通概念の形成の理論である。

4. 飛躍

諸身体の構成を質料的内容とする表現的観念が「共通概念」と呼ばれる。ところで、「共通 common」という語は、二つ以上の諸身体に共通の構成を意味し、諸身体が同一のものを意味しない。つまり、諸身体が「一つの全体の部分として存在し、その全体がこれらの部分との関係によって一般的機能を行行使する」際に、「諸部分が全体との関係によって」持つものが「共通」のものであり (254)、例えば、潜水艇が砲撃を為す際、潜水艇の諸部分としてソナー手や砲撃手が存在し、砲撃という一般的機能として行使されているので、ソナー手らは共通のものを持っている、と言える。ゆえに共通概念とは諸力能の合一的行使が実現する際に、その集合的結果の内在因としての「関係比 rapport」の観念である。

他方、個別的な各身体の観点では、一つの関係比がある合一的行使において具現される際、一つの身体はその一部の関係比をなしている。この観点での共通概念とは、自らの身体が他の諸身体（人以外の物体も含む）との協働を可能にしている原因としての構成比の

⁶ 補足しておくならば、ここから人が所有しうる諸観念には大きく二つのケースがあると考えられる。一方は、観念が事物の対応を示すだけのケースであり、例えば、外的物体としての円との対応を示すだけの円の表象的観念である。他方は、観念がその内在的な原因との連結を示しているケースである。例えば、ある者が自らの思惟によって、円を「一端が固定し他端が運動する線によって成り立つ図形」と定義するとき、その者は現前する円だけでなく、これまで産出された円、これから産出される円など、あらゆる円の原因の認識を含みかつ説明することができるようになっている。言い換えれば、その者は円を理解する者、円の表現的観念を所有する者に生成している。したがって、第一種における精神は、外的事物との出会いの結果として形成された表象的観念しか所有していない状態を、第二種における精神は、少なくとも一つの表現的観念を所有している状態を意味する。

観念である。ゆえに例えば、表現的観念としての円の定義を聞き覚えで知っているだけでは、それは第一種に過ぎず、実地経験を伴った形相的原因としての理性が表現されて初めて、その観念は表現的観念の資格を持つ。ゆえに、共通概念には既知の（よく知られている）真偽の基準は適用されない。適用されるのは、それを形成する者自身の協働的生を可能にするものが捉えられているかどうか、の真偽の基準である。ゆえにドゥルーズは、共通概念は「物理的あるいは数学的観念であるというより」、自らの身体的経験に実践的な適用と機能を果たす「生物学的観念」であり、すでに考えられた、あらゆる人間学的目的を排除した哲学=倫理学において「真の観念の役割を果たす」と指摘する⁷ (257)。

こうして最初の共通概念の形成の契機が、他の事物と協働的に「よく」生きている経験そのものに存することが見えてくる⁸。もし一つの身体が他の事物と合一しえたならば、そこには一つの共通の構成がある。この偶然の出会いが「受動的な喜びの出会い」と呼ばれ、また諸々の偶然の出会いの中で喜び-よい出会いを増やし、悲しみ-わるい出会いを避ける精神の働きは「理性の第一の努力」、共通概念を形成する努力は「理性の第二の努力」と区別され、定義される (252; 266)。では、いかにして共通概念は形成されるのか。

ドゥルーズが強調するのは、理性の第一の努力によりよい出会いを首尾よく重ね、最終的に共通概念を形成できるほどに十分に増大したとしても、それが共通概念の形成を生じさせるわけではない、ということである (259; 261)。つまり、受動的な力能の増大と増大した力能の能力への生成とは別の問題であり、どれほど喜びの出会いを重ねても第一種に留まりうる、ということである。では、いかにして共通概念の形成と同時に第二種への移行が生じるのか。ドゥルーズの説明は次のように終えられている。

受動である限りの喜びの情念の集積によってではなく、むしろこの集積に乗じて、十全な観念を我々に所有させる真の「飛躍 saut」によってなされる (262)

これがこの議論のピークである。もし第一種と第二種の間には断絶があるならば、人がある時に事の原因を理解し、またそれに基づいて理性的に事を進めていく事実や、『エチカ』の推論が最初から共通概念に基づいて進められている、という事実はあり得ない。移行は事実問題として存在する。しかし SPE でドゥルーズは、思考不可能なものとしての「飛躍」の存在に直面し、それを示すに止まり、議論を終えてしまうのである。

ところでしゅちよ『差異と反復』でドゥルーズは、思考不可能なものを思考することを真の思考と主張した (Cf. 181-182)、ここにドゥルーズ自らの哲学の宣言があった。しかし、同年の SPE では、それが十分に実践されていない。この意味でも、表現的生成の理論は「不

⁷ 製作物（共通概念）は、その製作者の倫理的な生を可能にするならば、任意の基準を排撃しても構わない。道徳的対立（善悪）と倫理的差異（よい・わるい）の対立は、第 15,16 章で論じられるが、ここに孕む客観的基準（美德-悪徳）の問題は指摘されず、後の SPP で前景する。

⁸ ゆえに、できる限りあらゆる人間にとっての表現的生成の可能性を保存する共同社会の形成が政治学的問題となる (chap.16)。

十分」であると言わざるを得ない。またこの理論がスピノザの問いが含む意味の展開として中心的なものであるのだから、ここから SPE を「未完成」と結論せざるを得ない。

5. 結論：未完成の理由とドゥルーズの実存主義的解釈

ドゥルーズのスピノザ解釈に関する先行研究では、その「経験論的解釈」や SPE と同時期の二主著との相関的検討による「意味論的解釈」の指摘（朝倉 2017）、あるいは、SPP は SPE を超えていない、という評価がある（ドス 2009 165 頁）。これらに対して、内的方法に従う本発表は、ドゥルーズの「実存主義的解釈」であることと、SPE がその解釈がピークではないことを主張する⁹。というのも、ドゥルーズが「思考不可能なもの」としての「飛躍」の主題ないし語を持ち出す際に、彼が念頭に置いているのはキルケゴールの実存主義だからである¹⁰。また実際に、ドゥルーズが「飛躍」を論じる際の問題の定式は、SPE の表現的生成のそれと酷似している¹¹。すなわち、

問題は、ある特定の時点で、量的に連続するものが新たな質へと変容するのはなぜか、ということである。[...]。ではなぜその時点であってそれとは別の時点ではないのか。キルケゴールにとって存在者とは質である。それは飛躍、質的飛躍である。量が質を引き起こすことはあり得ない。これは重要な主題である。（QF 67-68 頁）

ドゥルーズにとっての「飛躍」は、量と質の関係の問題における概念である。そしてこの事情を SPE に差し戻すと、ドゥルーズがスピノザの理性の二つの意味を区別している理由がよくわかる。つまり、出会いの選別を意味する理性概念（第一の理性の努力）は力能の量的変化の問題において作られており、共通概念を形成する力能を意味する理性概念（理性の第二の努力）は存在者の新たな質の問題において作られており、第二種への移行の問題は、この関係それ自体の問題なのである。

加えて、こうした実存主義的解釈を前提するならば、SPE の未完成の理由を考えることもできる。それは、理性概念の実存主義的解釈だけでは思考不可能なものが残るということ、逆に言えば、それを思考するには別のことも考慮する必要があった、ということである。というのも、「飛躍」とは、存在者の質がある時点と別の時点との間で非連続的なもの

⁹ 後の 1980 年 12 月 9 日のスピノザ哲学の第三講義でドゥルーズは次のような指摘に至っている。「スピノザが本質を語る時、彼の関心は本質ではなく、存在 l'existence と存在者 l'existant にあります。言い換えれば、何があるかは、本質のレベルでなく、存在のレベルでの存在者との関係にしかありません。このレベルですでにスピノザにおける実存主義があるのです un existentialisme chez Spinoza。したがって、人間の本質は問題ではない。スピノザにおける力能の内にはしかないであろう本質は、道徳が実現を担うような人間の本質ではなく、全く別のものなのです」。

¹⁰ ドゥルーズは、『ベルクソニズム』（1966=2017 檜垣立哉・小林卓也訳 法政大学出版局）で連続性を重視するベルクソン哲学における非連続的な「飛躍 saut」の意味を論及する際も、キルケゴールの「飛躍」を念頭に置いており、「飛躍のパラドクス（=思考不可能なものとして飛躍）」を論じている（59-60 頁）。

¹¹ 『差異と反復』の学習論の中でも、この定式と酷似する問題提起がなされている。すなわち、「諸々の答えの非連続性は、どうして理念的な学習の連続性を背景に出現するのか[...]。[...]。学習すること、それは理念を構成している諸々の関係比の普遍を洞察することである」（214）。

として解される限りでその間それ自体の観念として現れるが、この際に思考は「瞬間」の次元で作動している。つまり、二つの瞬間的状态を比較する知的操作を前提する限りで、飛躍は思考不可能なものとして現れる。ゆえに「持続」の次元を考慮したこの間それ自体の概念をスピノザ哲学内部で作り上げ、理論的再構成をおこなう必要があった。そして実際のところ、スピノザにはそれに対応する概念があり、SPE でも指摘されてはいた。すなわち、「二つの状態を比較する[...]知的操作」ではなく、「ある連続した持続における過去と現在の具体的な関係」それ自体を包含する観念としての「情動-感情 affects-sentiments」である(199-200)。ただ68年時点のドゥルーズは「情動」を自らのスピノザ理解に不可欠な「概念」として作り上げてはいなかった¹²。80年頃の再解釈において、前後の状態と結びつく力能の増減としての「感情」から無表象的な力能の増減それ自体としての「情動」概念が厳密に区別され、その上で理論的再構成がおこなわれるのは、少なからずこうした事情によると思われる¹³。そして、SPEが未完成である理由、それは、その実存主義的解釈にも関わらず、スピノザ哲学における持続の次元の考慮が不十分だったこと、と言える。

以上から本発表は、SPEにおけるドゥルーズの実存主義的解釈と、その解釈がピークではないこと、を結論する。ただとなれば、80年頃のドゥルーズは、表現的生成の理論のいかなる展開に至っているのか、という問題が出てくる。これは今後の課題である。

¹² 情動の不十分な理解については、イントロダクションで指摘した「スピノザを理解することはまだ始まってさえない」という1977年の述懐の意味とも整合する。まずドゥルーズが情動に着目することになる契機は、彼が1970年に着任したパリ第八大学での講義においてであり、講義を続ける中で、哲学の理解には概念による哲学的理解だけではなく、情動による「非-哲学的理解」もあることに気づいた(PP 191)。そしてこの気づきは70年以降に生じたのだから、68年のSPEで情動による非-哲学的理解によってスピノザを理解することができていなかったことになる。78年以降にドゥルーズがスピノザを「哲学者中の哲学者」「究極の哲学者」と評するのも、スピノザが哲学に不可欠な「哲学的理解」と「非-哲学的理解」の双方を満たしていることにドゥルーズが気づいたからである(PP 191)。

¹³ 70年頃のドゥルーズはスピノザの affectus を「affect-sentiment」と解釈していたが、1978年のスピノザ講義で、多くの訳者がスピノザの「affectus を sentiment と訳しており、両方を同じ言葉に翻訳するよりはいいですが、フランス語が「affect」という言葉を提供しているにもかかわらず、「sentiment」という言葉に頼る必要があるとは思えません」と述べ、外的対象と一致する表象的観念なしにそれ自身としてある「無表象的な」情動を定義し、以降この定義を維持する。また1981年の第七講義では、瞬間・持続・永遠の三つの次元を区別して、スピノザの時間論が論じられている。

注

ドゥルーズの著書からの引用の際の略号は以下とする。

- ・『経験論と主体性』 = 「ES」
- ・『基礎付けるとは何か』 = 「QF」
- ・『スピノザと表現の問題』 = 「SPE」
- ・『ダイアローグ』 = 「D」
- ・『スピノザ 実践の哲学』 = 「SPP」
- ・『記号と事件』 = 「PP」

スピノザの『エチカ』から引用の略号は、E(エチカ)-数字(部)-D(定義)/A(公理)/P(定理)-番号-証明・備考等、の順での以下のようにする。

- ・例1：第一部定義六一 → [E1D6]
- ・例2：第二部定理四〇備考 → [E2P40 備考]。

参考文献

- Gilles Deleuze, 1953(1980) *Empirisme et subjectivité*, PUF. (ドゥルーズ、ジル 2000 『経験論と主体性 ヒュームにおける人間的自然についての試論』、木田元・財津理訳 河出書房新社)
- , 1957 *What is Grounding?* / May 1, 1957
<https://deleuze.cla.purdue.edu/index.php/seminars/what-grounding/lecture-01> (ドゥルーズ、ジル 2018 『基礎づけるとは何か』 國分功一郎ほか編訳、筑摩書房)
- , 1968(1990) *Spinoza et le problème de l'expression*, Les édition de Minuit. (ドゥルーズ、ジル 2014 『スピノザと表現の問題』 新装版 工藤喜作ほか訳 法政大学出版局)
- , 1968(2017) *Différence et répétition*, PUF. (ドゥルーズ、ジル 2007 『差異と反復』 上 財津理訳 河出書房新社)
- , 1978 *Spinoza: The Velocities of Thought / 00 January 24, 1978*.
<https://deleuze.cla.purdue.edu/seminars/spinoza-velocities-thought/lecture-00>
- , 1980 *Spinoza: The Velocities of Thought / 03 December 9, 1980*.
<https://deleuze.cla.purdue.edu/seminars/spinoza-velocities-thought/lecture-03>
- , 1981. *Spinoza. Philosophie pratique*, Les édition de Minuit. (ドゥルーズ、ジル 2002 『スピノザ 実践の哲学』 鈴木雅大訳 平凡社)
- , 1990(2013). *Pourparlers, 1972-1990*, Les édition de Minuit. (ドゥルーズ、ジル 2007 『記号と事件 1972-1990年の対話』 宮林寛訳 河出書房新社)
- Gilles Deleuze et Claire Parnet, 1996(1977). *Dialogues*. Flammarion. (ドゥルーズ、ジルとパルネ、クレール 2009 『対話』、江川隆男・増田靖彦訳、筑摩書房)
- 朝倉友海 2017 「ドゥルーズにとってのスピノザ—『エチカ』の意味論的解釈をめぐって」(『主体の論理・概念の倫理：二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』所収 343-362 頁、以文社)
- スピノザ 1951 『エチカ 上・下』 畠中尚志訳 岩波書店
- 1931 『知性改善論』 畠中尚志訳 岩波書店
- ドス、フランソワ 2009 『ドゥルーズとガタリ 交差的評伝』、杉村昌昭訳、河出書房新社

